

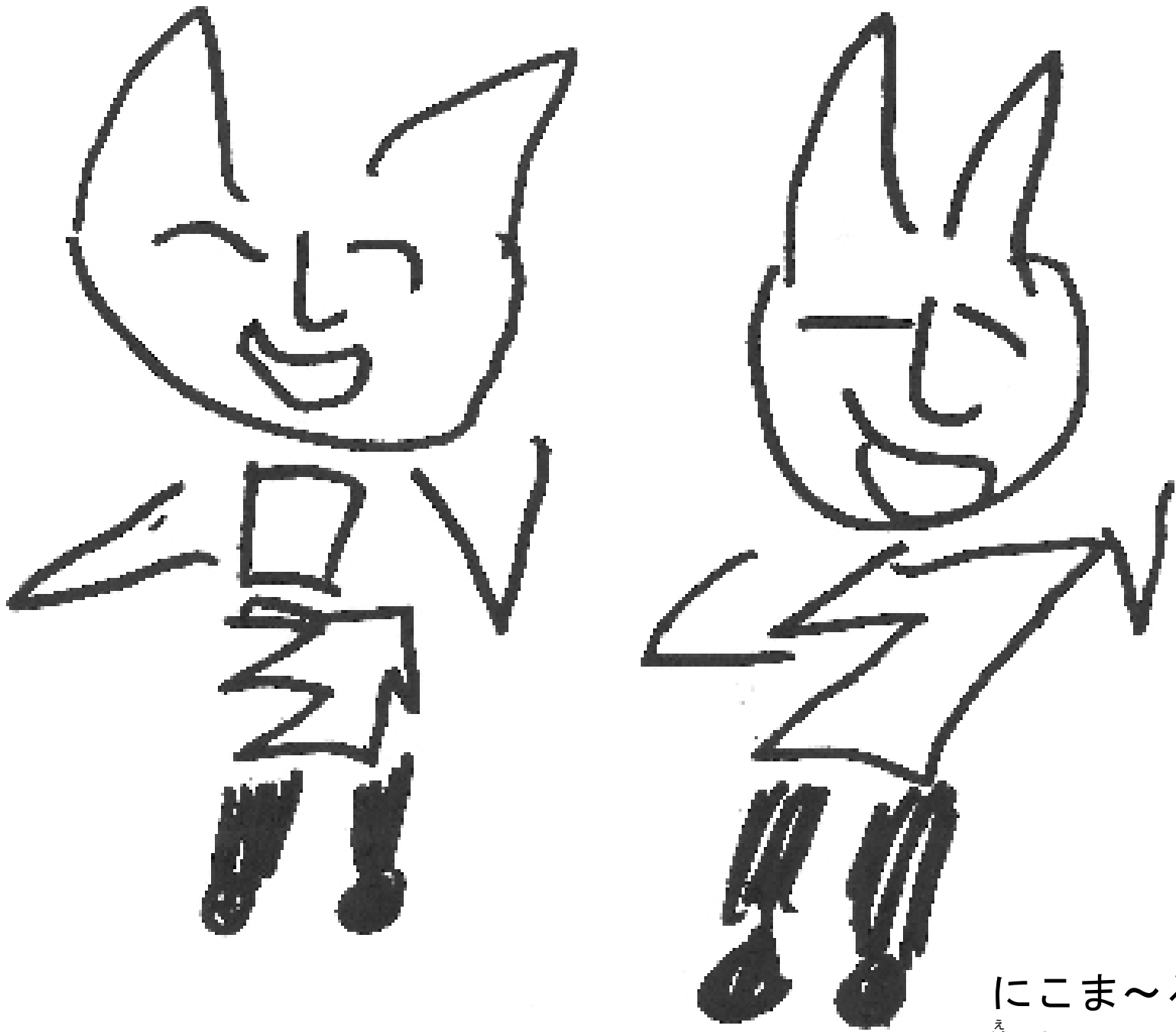
編集人：ぶくぶくの会 〒564-0025 吹田市南高浜町1-17-2A (総務)  
TEL 06-6317-5598、FAX 06-6317-0936 Mail：so-mu@puku-2.com URL：www.puku-2.com  
代表：馬垣安芳 編集長：上田かおり 1部200円  
年間購読料：個人会員2000円 広報会員(3部)5000円  
法人会員1口(5部)10000円 賛助会員(1部)10000円  
振替口座00940-0-161341  
「まねき猫通信」



もくじ

とくしゅう おおさかふ とうしやう む  
特集：大阪府オールラウンド交渉に向けて-2  
たの かんらんしゃ みはら  
リレ-エッセイ：楽しめなかった観覧車-三原ひろみ-4  
ふうらいぼう につき ま こうりゆうかい よりたかつねのぶ  
風来坊日記-ごちゃ混ぜの交流会-頼尊恒信-6  
あかし とよなか せんしんじれい しきつ ふるしようかずひで  
明石・豊中の先進事例を視察-古庄和秀-7

題字：  
塩澤 文男  
(しおざわ・ふみお)



にこま～るねこ

絵：おーちゃん (奏海の杜)

トリの眼・ムシの目・ニャンコの目

ヒットラーが計画した「T4作戦」という障がい者の安楽死計画に対して、クレメンス・フォン・ゲーレン司教は教会での説教で公然と非難した▲「貧しい人、病人、非生産的な人がいてあたりまえだ。私たちは、他者から生産的であると認められたときだけ生きる権利があるというのか？非生産的な市民を殺していいという原則がでて実行されるならば、我々が老いて弱ったとき、我々も捨てられるだろう。非生産的な市民を殺してもよいとするならば、今、弱者として標的にされている精神病患者だけでなく、非生産的な人、病人、傷病兵、身体が不自由になった人すべて、老いて弱ったときの私たち全てを殺すことが許されるだろう」▲人間の命には等しく尊厳がある。にも関わらず、人を殺し、その尊厳を奪うことをよしとする者は、自らの正当性を如何に主張するか？さらに、障がい者は生きるに値しないという価値観は、どこから産み出されるか？あなたが人間であるならば、答えて欲しい。老若男女が答えて欲しい▲命に値段があるか？あれば、お国のために戦死した兵隊さんの命はなんぼのものじゃ？炭鉱で死んだ鉱夫は何円？広島・長崎の被爆者は如何ほどの値打ち？ビキニ環礁で被曝した「第五福竜丸」とその船員は、お幾らです？ (ハギ)

# しょうだいいん たいおおさかふ こうしょう む 障大連 対大阪府オールラウンド交渉に向けて

## つ あ ふくしせいど 積み上げてきた福祉制度の はいし しゆくしょう と 廃止・縮小を食い止めよう

しょうだいいん しょうがいしゃ じりつ かんぜんさんか 障大連（障害者の自立と完全参加 を目指す大阪連絡会議）議長 古田朋也さん



▲集会後、デモに出発した

7月10日、対大阪府オールラウンド交渉に向け「障大連 総決起集会」が大阪市立中央区民センターで行われました。今年度は、総合支援法施行3年目の見直しや、2018年度からの障害福祉サービスの報酬の検討が予定されており、自立生活援助や重度訪問介護の入院時利用など、

### 特に重要な 今年の対府交渉

編：対府交渉のポイントとは？

古田：昨年の相模原の障がい者施設での殺傷事件から1年が経ち、社会にはびこる差別意識を取り除くために、一層「地域での共生の実践」を推進していかねばなりません。しかし、国や大阪府は、来年度予算編成に向けて「財政難」を理由に、福祉制度の廃止・縮小を検討しています。また来年は、3年に1度の障がい福祉サービスの報酬見直し時期です。今年度の対府交渉は特に

重要制度の検討が始まっています。総決起集会は、これら諸制度の内容を再確認し、財政難を理由に切り縮められることのないよう要求するためです。集会後、大阪城公園までデモ行進をしました。議長古田朋也さんに対府交渉のポイントや意義について聞きました。

（文責・編集部）

重要です。来年度からの総合支援法の見直しやサービス報酬改定では、次の分野での縮小が懸念されています。まず①重度訪問介護の入院中利用の問題です。入院中の介護は、病院で対応できない場合も多いのですが、ヘルパー利用が認められませんでした。ようやくこれを認める制度が始まる予定ですが、対象者が限られようとしています。これまで重度訪問介護を利用してきたごく一部の重度障がい者（支援区分6だけ？）に限定されようとしています。

2つ目は、②グループホーム（以下GH）における重度障がい者へのホームヘルプが、今年度末で使えなくなる可能性があります。GHでのヘルパー利用は2006年の自立支援法成立時に一旦廃止され、09年に復活したものの、「3年間の経過措置」とされ、その延長という形で継続されており、正式には認められていません。来年4月の廃止が決まれば、重度障がい者はGHでの暮らしができなくなり、また新たに「自立生活援助」という制度が

始まりですが、GHからの軽度の人の追い出しにつながるよう注意しなければなりません。さらに、③生活保護の見直しも検討されています。生活扶助や障がい者加算などが引き下げられる恐れがあります。生活保護では昨年も他人介護料が大幅に引き下げられそうになったり、各市町村では、預貯金の額によって保護を停止したり、住宅扶助の額を上回る家賃であることを理由に引っ越しを求め、事例が相次いでおり、来年度に向けて生活保護の締め付けがますます強められることのないよう、国や府に働きかけていかなければなりません。

また、大阪府でも、医療費の負担が減免される「重度障がい者の医療費助成制度」がありますが、財政難を理由に来年4月

また入院中の介護内容がどこまで認められるかも心配です。医療関係の法令では入院中の介護は病院側が行うこととされているので、実際には個々の介護はできるか、身体介護も含め必要な支援が使えるのか懸念されています。ひよっとすると医療スタッフに介護の仕方や支援の内容を伝えるだけとされるかも知れません。

全国的に高いレベルの大阪の障がい福祉制度 前向きな制度も始まっています。大阪府でも差別解消条例が制定され、差別事例の相談に乗り解決していく取り組みも始まっています。しかし、まだまだ

しまう事例も多いのです。また、報告された事例に対して、慣れた行政の窓口担当者が、「差別ではない」と言い切ってしまうたり、「匿名では受付られません」とはねつけたり、窓口での間違っただけの対応事例もあります。しっかりと作りあげていかなければ、せっかくできた仕組みそ

ものの信頼性を失ってしまうという課題もあります。編：オールラウンド交渉の意義とは？ 古田：大阪府とのオールラウンド交渉（全課題交渉）は、1987年から毎年実施し、今回で30年を迎えます。当初私

7/15 入部香代子さんの追悼集会 (豊中)

# “みんな”に数えられていない障がい者

7月15日、とよなか男女共同参画推進センター「すてっぷ」にて、障害者の自立と政治参加を進めるネットワーク設立20周年企画として、入部香代子氏の追悼集会が行われました。入部さんは、同ネットワークの初代代表で、「全国初の24時間介護が必要な車椅子女性議員」として豊中市議を4期=16年務めました。2013年7月24日、肝不全のため62歳で他界されました。



▲シンポジウムで思い出を語る馬垣さん(右)

入部さんの議員活動は、介護を受ける当事者の立場から福祉制度を充実させていくというもので、自立生活運動の先駆者です。追悼集会での発言を紹介しながら、入部さんの人柄と功績を振り返りたいと思います。

ぷくぷくの会代表の馬垣さんは、地域でともに活動してきた立場から、次のように語りました。—1996年4月、議員ネットワークの発足会議がひらかれました。当時は規約があるわけでもない有志の集まりでした。香代子さんは立候補の理由について、こう答えてくれました。『あらゆる場面に当事者が参加しなければ社会は変わらない。議会もそう。障がい者が議会に入ることで議会が変わり、議員が変われば、職員も変わる。議員は、体力・忍耐・精神力が必要です。しかし、議会という決定権のある場を元気な人だけに任せろにはいきません。障がい者が議会に入ること、変えていくことは確実にあります』と。

今や全国各地で障がい者議員が誕生し、ネットワークをつくっています。この力をさらに広げて日本を変えていきたいと思っています。—次に、ゆめ風基金理事で元箕面市議の八幡隆司さんは、阪神大震災当時を振り返り、次のように語りました。

—阪神大震災直後、多くの議員は選挙を意識して、これみよがしに動き回っていました。しかし入部さんは、震災について聞かれ『怖かった』と表現しています。その年の選挙では、「危険と恐怖を感じた自分のような人間が支援を受けられる災害対策こそ必要だ」と訴えて、再選を果たしました。これを見て私は、「豊中市民はすごい」、と思いました。

しかし入部さんの後継者として立候補した井上康さんは、2011年の市議選で落選してしまいました。ルッキズム(容貌=見た目による差別、外見至上主義)への敗北でしょうか。世の中は世知辛くなりました。—

この発言を受けて、同ネットワーク事務局・古庄大牟田市議は、熊本地震での経験をふまえて、入部さんが感じた「危機感と恐怖」について、次のように補足しました。—私は、熊本地震の被災地で、『うるさくてみんなが眠れない』と言われて、障がい者が避難所から追い出される現状を目の当たりにしました。入部さんは、これと同様なことを肌で感じたのだと思います。『私たち障がい者は“みんな”に数えられていないのだ』と—。

古庄さんは、同ネットワークの今後の展望として、「障がい者団体単独で議員を当選させるのは難しくなっている。地域でのつながりを大切にして、原則的な姿勢を保っている団体やグループとの連携を強化し、地方自治体への影響力をますます強めていきたいと期待しています」と締めくくりました。

られる障がい者団体として認知されなかった。2、3時間程度しか交渉できませんでしたが、地域での取り組みが広がって参加者が増え、毎年400、500名で、のべ2日間交渉するようになってきました。

私たちが障大連は、「障がい種別の垣根を無くそう」というスローガンを大事にしています。身体、知的、精神、視覚、聴覚、盲ろうの各障がい、施設や精神科病院に入っておられ



▲古田朋也議長

方も、いろいろな方がおられます。全ての障がい者の課題について、みんなで一緒に訴えていこうということで、オールラウンド交渉の場があります。「障がい者自身が自ら声をあげていくこと」も大事にしています。歴史を振り返ってみても、障がい者自身が声を上げて、「これはおかしい」、「この部分はもっと変えるべきだ」という主張と行動を繰り返し、積み重ねることで現在の基盤を

創ってきました。もちろん言い放しではなく、地域での実践を重ねながら、地域生活を営む上での問題点を明らかにし、新たな制度を提案し、行政の理解も進めながら地域の基盤を創ってきた経過があります。

大阪の障がい福祉の制度・基盤は、不十分な所はありますが、重度障がい者が地域で暮らせる一定の基盤があり、障がい種別を越え広範囲に利用できる制度設計にもなっており、全国的に見ても高いレベルに達していると思います。こうした制度も、重度障がい者を中心に「これでは障がい者自身が中心に暮らせない!」と強く訴え続けてきたからこそ、行政もその声を受け止めて、積み上げられてきたものです。

障大連が積み上げてきた交渉とは、単なる批判・追及ではなく、新たな提案を繰り返すことで、行政も一緒に考え、二人三脚で制度を改善し、どれほど重い障がいがあっても入所施設ではなく地域の中で自立生活を実現してきた経過があります。そうした取り組みを進めることが、差別をなくし、誰もが共に生きられる社会づくりにつながるものと思います。長年かけてこうして作ってきたものですね。